

鮫島有美子 声楽家

外国で暮らしてわかる 日本語の美しさ



©TAMJIN

さめじま ゆみこ

東京芸術大学声楽科、同大学院修了。ベルリン音楽大卒業。二期会会員。ウィーン在住。日本を代表する国際的ソプラノ歌手、オペラ「夕鶴」のつうを演じ好評を博す。世界各地でオペラやコンサートツアーで活躍中。

会社内での公用語を英語にするところが増えているらしい。私の友人の一人は、それでも公式のビジネスのやり取りには通訳を使う。自分の中途半端な英語で言質を取られないため、と言う。もちろん英語が出来るに越したことはないし、外資系の会社では不可欠の要素にもなり得るだろう。「内容を理解し、伝えるため」だけでいい外国語なら、間違いを恐れない勇気を持つ人」は比

較的短期間で出来るようになると思う。確かに「外国語を会得する」第一歩にはなる。でも日本人同士の間でも社内では英語で会話?! 最近、我々の日本語力の低下が嘆かれています。たっけ? それなのに、主語や論理をはっきり主張しなければならぬ英語で意思の疎通を図る? 自分の意見を述べる……? それに、英語が出来ないと本来の能力も認められ

なくなってしまうのかしら……。仕事の出来る人と英語の出来る人、どちらが優遇される? そして小学校から英語の授業? 家庭や基礎教育で母国語をきちんと教わってもいらないうちに、思考過程がまったく異なる言語を意図的に習うのはいいことなのだろうか……。さまざまな疑問が頭の中をめぐりめぐる。大学で始めた私のドイツ語はすぐさま「沈没」、それでもドイツでの留

学生生活の中で必要に迫られるうちに、日常には全く不便のない水準になっていた。初めてのレコードアルバム録音は「日本のうた」、ピアノ伴奏は今の夫（オーストリア人）、25年以上前の話である。片言の日本語は出来ても、詩の理解までは無理な彼のために、私は日本の歌のテキストをドイツ語に「訳し」始めた。その折の挫折感たるや、言葉に出来るものではない……。

まず、自分がどれだけ日本語をきちんと理解していなかったかが「証明」された。（英語のお得意な方もちよつと試して訳してみてください！）例えば「赤とんぼ」「荒城の月」……）言葉一つ一つを直訳しても何の意味が伝わらない。国語というものが、いかに「文化」であるかを身を持って知ったひとときでもあった。

というのは、言葉の後ろや行間にある世界、そこまで伝えられなくて詩の意味も、歌の感じもつかんでもらえないと分かったからだ。日本語の曖昧さ、美しさ、それゆえの詩的ならずばらしさ。さまざまな外国語の飛び交う中で暮らしていると、日本語に対する意識が新たに目覚めてくる。

ニューヨークでアメリカ人に英語で、「あなたはどっちのニーズか、チャイニーズ、それともジャパニーズ？」と揶揄で問われた岡倉天心は、即座に「あなたはどのキーか、モンキー、ドンキー、ヤンキー？」とやり返したと言う。皮肉をユーモアの皮で包んだこんな会話を英語で出来る日本人は、今の時代でも少ないかもしれないが、逆に最近外国の大学では、日本語学科専攻の学生が増

えたそうだ。一つの理由は、（冒頭のテーマとも繋がるが）、世界における日本のビジネスの重要性。もう一つは「日本文化への興味」の増幅。マンガにしろ俳句にしろ、日本語で味わいたいという外国人が多くなっているし、日本を訪れる、あるいは住んでいる外国人の数は、昔とは比べ物にならない。そして彼らの中には結構、ニホンゴワカラナイフリッをして、私たちのウチウチの会話をひそかに楽しんでいる人たち（例：私の夫！）がいるので、ご注意、ご注意！！

ところでご存知だろうか。ドイツ系からの移民が非常に多かったアメリカでは、その昔母国語を決定する際の住民投票で、ウワサによるとドイツ語がたった1票の差で英語に負けたのだそうだ！